

ローストビーフと菜食主義

— イギリス・ロマン主義時代の食の政治と倫理 —

川津雅江

ローストビーフの国

ウィリアム・シェイクスピアの『ヘンリー五世』(1599)第3幕7場でフランス人司令官たちがイギリス人はビーフを狼のように食べると噂したように、イギリスとビーフの連想はエリザベス朝時代にはすでにあった。当時イギリスを訪れたイタリア、ドイツ、フランスからの旅行者たちも、イギリス人は肉(ビーフ、子牛肉^{ツィーニール}、マトン、チキン、猟鳥肉、猟獣肉など)を大量に食べる国民であると報告している(Rogers 11-12)。そして18世紀までには、ビーフ、特にローストしたビーフはいわば国民食になっていた。18世紀はじめのスイス人旅行者ミュラは、イギリスでは、ローストビーフは「国王の食卓と同じように職人の食卓でもお気に入りの料理」であり、一切れが「20~30ポンドや30~40ポンドの重さがある」ことを観察し、「これこそが(いわば)イギリス人の繁栄と豊かさの象徴であると言えるかもしれない」と記している(Muralt 39-40)。ローストビーフはまた愛国主義の象徴にもなった。ヘンリー・フィールディングが1731年頃に執筆した5幕の喜歌劇『グラブストリート・オペラ』の中にある歌は、のちにリチャード・リヴァリッジによって5スタンザが追加されたヴァージョンが「古き良きイギリスのローストビーフ」のタイトルで一世紀半以上も大流行し、愛国歌としてさまざまな場所でうたわれた(Rogers 77-78)。

18世紀には、イギリス人の典型としてジョン・ブル(Bullの字義は「雄牛」)も登場した。ジェイムズ・ギルレイの1779年の諷刺画『お上品』【図1】では、質素な服を着たジョン・ブルは赤ら顔で、太っていて、ビール(フランスがワインとしたら、ビールはイギリスの酒)を飲み、ブルドッグ(牛攻めのために飼育された英国産の犬)を従えており、後ろの壁にはローストビーフがぶら下がっている。これに対し、隣の明らかに上流階級の



【図1】James Gillray, *Politeness* (1779). © The Trustees of the British Museum.

フランス人は痩せっぽちで、スープを飲み、狩猟用の犬であるグレーハウンドを従え、ジョン・ブルに「獣め！」と毒づいている。その背後の壁にぶら下がっているのは、フランス料理の高級食材であるカエルの足である。ローストビーフとカエルの足の対比は、愛国主義と、フランスと何度も戦争をしてきたイギリスにおけるフランス嫌いを端的に示すだろう。こうした伝統的なイギリス料理とフランス料理の対比、およびフランス料理のイギリスへの浸透に対する警告は、18世紀中頃から指摘されていた。スペイン王位の継承者を巡って行われた対仏戦争中（1744-48）、ロバート・キャンベルは『ロンドンの職人』（1747）において、「巨大なローストビーフがイギリス人の食べ物であったエリザベス女王の時代には、わが国の料理はわれわれのマナーと同じくあっさりした簡素なものであったが、今や「われわれの味覚はフランス風に調理された肉類や飲み物に順応している」ので、「魚や肉の自然な味」よりも、世界中から集めてきた「香辛料、浸け汁、そしてソース」という「緩慢な毒」で味つけした料理を好み、「病気の種」を育てていると嘆いた（Campbell 276-67）。1757年のブロードサイド「食事の変化、バラッド、古き良きイギリスのローストビーフの後日談」の挿絵【図2】は、そうした食事の変化によるフランス料理の危険性を示したものである。真ん中に立っている英国王衛士（通称はビーファイター）がフランス料理の食材のカエルの足を差し出し、右側のイギリス人はフランス料理を食べたせいで嘔吐している。

しかし、『お上品』より10年後の1789年にフランス革命が勃発すると、食はさらに政治的イデオロギーの意味合いが賦与されるようになった。ギルレイの『フランスの自由、イギリスの隷属』（1792）【図3】では、フランス人は貴族ではなく、革命を起こした下層階級の共和党员サンキュロットである。彼が自由と税免除を謳歌しながら、生玉葱をかじって飢餓状態であるのに対し、ジョン・ブルは高い税金で餓死しそうだと不平をこぼしつつ、ローストビーフを切り分けている。このジョン・ブルが肉の食べ過ぎで痛風にかかっていることは、痛みを和らげるために靴に切れ目を入れていることからわかる。

興味深いことに、フランス嫌いと愛国主義を巡る食がこのように政治化されてきたロマン主義時代に、ローストビーフの国イギリスで菜食主義者たちが登場した。本論では、当時の菜食主義者のうちジョン・オズワルドの言説に焦点をあてなが



【図2】"Change of Diet: A Ballad: being a Sequel to the Roast Beef of Old England" (1757). ©The Trustees of the British Museum.



【図3】James Gillray, *French Liberty, British Slavery* (1792). ©The Trustees of the British Museum.

ら、食の問題がいかに同時代の社会的・経済的・倫理的・医学的問題と結びついていたかを見てみたい。

フランス革命と菜食主義

『フランスの自由』のサンキュロットが生玉葱を食べているのは、ジャン＝ジャック・ルソーの思想の影響である。ルソーは『人間不平等起源論』（1755）において、人間は自然状態のとき、不平等や戦争は存在しなかったと主張した。そのとき人間は「土地の産物」のみを食べていたが、やがて「土地や気候や季節の相違」によって必要に迫られて、糸と針を發明して魚を捕ったり、弓と矢をつくって獣を狩ったり、火山などの火を知って肉を料理するようになっていった（Rousseau, *Discourse* 34-35）。その結果、社会が発展するにつれ不平等な階層や貧富の差が生じたのである。従って、ルソーは、『エミール』（1762）では、「肉に対する好みは人間にとって自然なものではない」ので、「この原始の好みを損なわないこと、そして子どもたちを肉食動物にしないことが何よりも大切である」と説いた。それは子どもの「性格」を残酷にしないためだった。「一般に肉をたくさん食う者がそうでないよりも残酷で凶暴であることは確かだから」であり、「[肉食の] イギリス人の野蛮なことはよく知られている」からだ（Rousseau, *Emile* 153）。

ルソー的菜食主義はフランスで1760年代頃から流行しはじめ、やがてフランス革命の平等主義の象徴の一つとして見なされるようになった（Stuart 207-08）。そしてイギリスにおいても、フランス革命に共感した急進主義者たちの中には菜食主義を唱えるものもいた。ジョン・オズワルドはその一人で、彼の『自然の泣き声—迫害された動物のための慈愛と正義への嘆願』（1791）はロマン主義時代において菜食主義を急進主義的共和主義に結びつけた最初のテキストである。

『自然の泣き声』

オズワルドは1760年、エディンバラで生まれた¹。1776年か1777年に、ブラックウォッチ [英国陸軍スコットランド高地連隊] の中尉になり、1782年にインドに赴任し、1783年に退役した。ロマン主義時代の菜食主義者・考古家のジョセフ・リットソンによれば、そのあと東インドを放浪中にヒンドゥー教に出会い、菜食主義者になったらしい（Ritson 199）。1783年末か1784年にロンドンに戻り、『ロンドン・クロニクル』や『ポリティカル・ヘラルド』、自身が編集する『ブリティッシュ・マーキュリー』などの雑誌に記事を書いたりした。そして1790年に革命国フランスのパリに渡り、ジャコバン・クラブに加わり、1793年にヴァンデの戦いで亡くなった。『自然の泣き声』のタイトル頁には、作者がジャコバン・クラブ員であることが明記されている。なお、このタイトルはルソー

のいう「人類最初の言語」たる「自然の泣き声」(Rousseau, *Discourse* 23)に由来する。

18世紀後期、他者に対する慈愛や共感がクローズアップされた感受性の時代にあらゆる分野で、動物も生きる権利(自然権)があり、人間と同じように痛みを感じるので虐待してはいけないと再三唱えられた。その最初の声を挙げたのはルソーである。『人間不平等起源論』で、動物は人間と同じく「感性的な存在」なので、無用に虐待されないという自然の権利を持つと主張した(Rousseau, *Discourse* 7)。しかしながら、ルソー以降のほとんどの動物愛護の言説は、トリストラム・スチュアートのいう「反肉食主義」だった。つまり、人間は動物を虐待してはいけないが、創世記第9章のノアの洪水後、神から動物の肉を食べる権利を授けられたと主張したのである。オズワルドはこうした反肉食主義の動物愛護に反発した。

『自然の泣き声』のギルレイが描いたとされる扉絵【図4】では、複数の乳房をもつ果実と果樹の女神ポーモーナが子鹿の死を嘆く様子が描かれる。彼女が嘆いているのは、ただ単に子鹿が狩りで殺されたからではない。テキストの中では、多産な自然の擬人化の彼女は、「なぜお前は自分の手を仲間の生き物の血に浸すのか。私は人類の必要物だけではなくて娯楽のためにも、十分に供給していたのではないのか」、「健康的で味のよい、栄養があって美味しいものが無限に多様な比率で混ぜ合わされたごちそう」を与えてきたのではないかと人間に問いただしている(Oswald 38-40)。扉絵のポーモーナはそうように子鹿が食べられるために殺されたことを嘆いているのである。



【図4】John Oswald, *The Cry of Nature* (1791), frontispiece.

オズワルドは、ヒンドゥー教がどの創造物も「同族」であると見なし、「あらゆる動物の幸福を喜び、その痛みを同情する」のに対し、ユダヤ・キリスト教では、人間が「世界の最高権力を持つ暴君、すべての創造物の生と死の支配者」として君臨し、「道徳体系」を人間だけに限定し、動物には冷酷であると、厳しく批判する。そして、動物には人間のような感情も理性もなく、不滅の魂もないとして、人間と他の動物との類似性を否定しているが、それは「無情な独断的な説」であると退ける(Oswald 3-6)。さらにオズワルドは、動物に対し無慈悲な人間中心主義の考えがイギリスの食卓において日常的に繰り返されていることを問題視し、「われわれの祝宴は、ポリュペーモスの極悪非道な食事である」と述べている(Oswald 9-10)。ポリュペーモスはオデュッセウスの部下たちを二人ずつ食べたギリシャ神話の巨人である。イギリスの食卓で同族の動物の肉料理を食べることは人肉を食べることと同じことであると、ヒンドゥー教徒のオズワルドは断言するのだ。

その他、オズワルドは、人間の食べ物は元来自然の植物であり、そのときは平等で平和な世界であったのに、肉を食するようになって人間は残酷になり、人間同士が殺し合う戦争が起こるようになったこと、動物の肉を食べるとやがて人の肉も食べるようになること、

自分で殺さずに肉屋に動物を殺してもらってその料理を食べていることこそ、人間には生来「残虐さへの嫌悪、あらゆる動物への思いやりの感情」(Oswald 31)がある証左であること、人類最初の肉食は祭司が神に供えた動物の肉をたまたま食べたときであるが、それから祭司は肉食を正当化するために神によって肉は人間の食べ物として与えられたと説き始めたこと、肉は自然物ではないために人間にとって不適な食べ物で、病気や短命の原因になること、人間が自然に生えている植物だけを食べていた「原始の無垢の饗宴」もしくは「黄金時代の至福」(Oswald 64)から墮落して、肉を食べるようになった歴史などを詳述し、後注では、自分の主張を裏付けるために、古今の文献からおびただしい量の文章を引用した。全部で156頁のうち本文は82頁までで、半分近くの頁は後注である。

【別表】に、オズワルドの後注における主要引証文献を示した。一部を紹介すると、注1では、動物には理性がないという聖アウグスティヌスへの反論として、古代ギリシアの新プラトン主義者ポルフェリオスの『禁肉食論』から、動物は人間より知性が劣るだけで理性がないのではないとした部分²、18世紀後期のスコットランドの裁判官・人類学者ジェイムズ・バーネット・モンボドーの『言語の起源と進展』(1773-92)から、タートル地域やシベリアの馬は「賢明な動物」で、コミュニティを作って敵から身を守るといふ部分や人間よりも動物が優れている例を指摘した部分などを引いている(Oswald 83-90)。

注2では、ヒンドゥー教の原理が古代ギリシア・エジプトの哲学に通じることに關して、オルペウス教の聖歌、ピュタゴラスの黄金詩などをラテン語で引用し(Oswald 90-92)、注3では、モンボドーの上記出典から、オランウータンは果物を食べるので獲物を追わない(つまり、他の動物を殺さない)という箇所を引用する(Oswald 92)。

注4では、肉食が人間の心身の健康に悪いことを示すために、18世紀初めの有名な医師ジョージ・チェーンの『健康・長寿論』(1725)から、動物は人間と同じく病気になるので、人間の食べ物としては不適であること、動物が食べる食べ物(すなわち植物)は、動物そのものよりも消化がいいこと、パン、水、野菜だけを食べた東方キリスト教徒の長寿者たちやその他の菜食を続けた長寿者たちの名前のリスト、肉や人工的な飲み物(ワインなど)はもともと人間のための食べ物ではなかったが、神が大洪水のあと、人間の寿命を900年もしくは1000年から70年に短くするために、肉と人工的な飲み物を人間の食べ物にしたことなどを引用した(Oswald 92-98)。続いて、ルソーの『エミール』からは、先に述べた「肉に対する好みは人間にとって自然なものではない」云々の箇所に加えて、動物性の物質は腐敗すると虫がわくから、動物の肉を食べる乳母に育てられた子どもは、野菜を食べる乳母に育てられた場合よりも腹痛や虫を起こしやすいことなどを引用し³、そして『エミール』でも引用された古代ギリシアのプルタルコス「肉食に關して」からは人間が肉食するようになった経緯の一部をラテン語で掲載した(Oswald 98-101)。スコットランド出身の医師ジョン・アーバスノットの『滋養物の本質論』(1731)からは、植物が動物の病を治す力があるとし、栄養のある葉野菜や根菜の具体的な名前を挙げた箇

【別表】『自然の泣き声』後注・主要引証文献一覧

(括弧前はオズワルドの表記。引証出典の版が確認されたものは丸括弧、それ以外は角括弧で示した。)

- Astley's Voyages. (Thomas Astley, ed., *A New General Collection of Voyages and Travels*, 1745)
- Arbuthnot on Alim. (John Arbuthnot, *An Essay Concerning the Nature of Aliments*, 1731)
- St Aug. de moribus Manichæorum. [St Augustine, *Of the Morals of the Catholic Church and On the Morals of the Manichæans*]
- Buffon's Nat. Hist. (Georges-Louis Leclerc, Comte de Buffon, *Natural History, General and Particular*, translated by William Smellie, vol.4, 1780)
- Cheyne's Essay on Health. (George Cheyne, *An Essay of Health and Long Life*, 1724)
- Cowley, "on the Danger of an honest Man's keeping Company." (Abraham Cowley, "The Danger of an Honest Man in much Company," in *Select Works in Verse and Prose of Mr. A. Cowley*, vol.2, 1772)
- Death of Abel (Salomon Gessner, *The Death of Abel*, translated by Mary Collyer, 8th ed., 1766)
- Dow's Hist. of Hindostan. (Alexander Dow, *The History of Hindostan*, 1772)
- Dr. Elliot, *elements of natural philosophy, as connected with medicine*. (John Elliot, *Elements of the Branches of Natural Philosophy*, 1782)
- Du Halde (Jean-Baptiste Du Halde, *Description geographique, historique, chronologique, politique et physique de l'empire de La Chine et de la Tartarie chinoise*, 1735)
- Hymn to Cama-deva, translated by Sir W. Jones. (in William Jones, *The Works of Sir William Jones*, vol.6, 1799)
- Letters from the East Indies. (Jemima Kindersley, *Letters from the Island of Teneriffe, Brazil, the Cape of Good Hope, and the East Indies*, 1777)
- Monboddo on Language. (Lord Monboddo, *Origin and Progress of Language*, vol.1, 1773)
- Orphic. Hym. [*Orphic Hymns*]
- Ovid. Fast. [Ovid, *Fasti*]
- Ovid, Metam. [Ovid, *Metamorphoses*]
- Plut. Convivium. [Plutarch, *The Dinner of the Seven Wise Men*]
- Porphy. de Abstin. [Porphyry, *On Abstinence from Animal Food*]
- Rousseau, Emile. [Jean-Jacques Rousseau, *Emile, ou De l'education*, 1762]
- Sale's Koran (George Sale, translator, *A Preliminary Discourse*. Prefixed to *The Koran, Commonly Called the Alcoran of Mohammed*, 1734)

所や、一番栄養のある植物性の食べ物はミルクであることなどの箇所を引用した (Oswald 103-09)。ちなみに、ミルクは動物の体から出るものだが、当時は野菜に分類されていた。ロンドンの内科医ジョン・エリオットの『医学に関連する自然哲学の諸部門の原理』(1782)からは、植物性の食べ物の発酵はワインや酢を生じるに対し、動物性の発酵は腐敗であり、それは死骸に起こるという部分(第四章の「発酵作用に関して」全部)を引用し、動物は人間の食べ物として不適であることを裏付けた (Oswald 109-13)

注6では、フランスの博物学者ビュフォンの『博物誌』(1749-1788)のウィリアム・スメリによる英訳版(1780)第4巻から、人間の胃や腸が肉食動物と同じであること、そして肉食動物は肉だけを食べて生存するという説を唱えた箇所を引用し、それに対して、ヒンドゥー人やヨーロッパのほとんどの国の小作人たちはもっぱら菜食だけで生きていると反論した (Oswald 113-14)。

その他、ポルフェリオスの『禁肉食論』からは、注1以外にも、注12で、人間が動物の言葉を理解することができないことが動物が話す能力がない証拠にはならないことなど (Oswald 118-21)、注20で、古代ギリシア人が果物だけを食べ、古代シリア人たちが動物を食べなかったことや (Oswald 132-33)、フェニキア人が最初に神への供え物として動物を捧げて焼くようになってからしばらくして、祭司がたまたまそれを食べたことをきっかけに肉食が始まったという経緯 (Oswald 135-37)、注22で、アテネで起こった最初の雄牛殺しにまつわる逸話 (Oswald 142-47)など、多くの箇所をラテン語や英語で引用した。

こうしてオズワルドは人間が動物の肉を食べることに対し、哲学、宗教、倫理、解剖学、医学、人類学などさまざまな分野から反論しながら、人間は生来、精神的にも肉体的にも地上の産物だけで生きることができると主張し、黄金時代や墮落以前の楽園における万物が平等で平和な世界が未来において実現されることを望んだ。『自然の泣き声』の「読者案内」欄では、(フランス革命のように)「ヨーロッパの野蛮な政府がよりよい制度に道を譲る」動きがあちこちで起こったときに、「平和と人間に対する善意の感情が増大して、仁愛の広範囲内に低い階層の生き物も含むような時代が近づきはじめる」(Oswald ii)、つまり人間間だけではなく、人間と動物の間の差もなくなるだろう、と希望的観測を述べている。

貧者の食

しかしながら、このような菜食主義者の主張は皮肉にも肉を購入できる階級だから可能であると言えないだろうか。なぜなら、オズワルド自身も指摘しているように、どこの国でも果実は自生し、誰でも容易に手に入れることができるに対し、「食肉は人類の大多数が届かない贅沢品」で、「トルコ、フランス、スペイン、ドイツ、そして、すべての国で

最も肉食性のイギリスでさえ、小作人は肉を食べる余裕が減多にない」(Oswald 15-16)からだ。これは肉食が社会的不平等の象徴であることを端的に示している。しかしながら、肉を食べたくとも経済的に食べることができない下層階級の人々にとって、オズワルドの急進的菜食主義も、おそらく特権階級の発言に聞こえたかもしれない。菜食主義の言説はかなりエリートのイデオロギーであると、P・B・シェリーの菜食主義を論じたティモシー・モートンも指摘している (Morton 35)。

リチャード・プライスは『復帰権的支出に関する所見』第三版(1773)の補遺(1771年の初版には補遺はない)において、前の時代と自分の時代の貧者の食べ物と比較した。ヘンリー八世時代には、第25国会制定法で、「ビーフ、子牛肉、ポーク、マトンは貧者の食べ物」として言及され、1ポンドあたり約半ペニーと値段が低く抑えられていた(Price 384)。17世紀には肉は現在(1773年時点)の約半分の価格だったが、穀物(小麦、ライ麦、オート麦、大麦)は最近40年間の平均価格より高かった。しかし、パンは貧者の必需食料品ではなかったため、彼らは別の安い食べ物や自分の土地で育てた作物を食べて生きることができた(Price 383-84)。ところが、小規模の農地や共有地を羊や牛のための牧草地に変える囲い込みが進み、プライスの言葉によれば、「農場の独占」(Price 383)が行なわれるようになると、貧しい農民たちは小さな土地を奪われ、大規模農場の雇い人や都会の賃金労働者になり、食料品をわざわざ買わなくては生きてはいけない状態に陥ったのである。

プライスがここで指摘している囲い込みは、18世紀におきた肉産業の発展と関連がある。つまり、それ以前に食べられていた牛の肉は人間の残飯を餌にしていたオスの子牛や弱ったり年をとったりした乳牛の肉だったが(Rogers 12; Stuart 403)、農業改革のための囲い込みによって、はじめて人間の食べ物である穀物を餌にして食肉用の動物の飼育が大規模に行われ、その肉が市場で売買されるものになったのである(E. F. Williams 47, 49)。従って、貧者には肉は高値の花になり、彼らは食料品価格の中で一番安いパンを主食にしていた。プライスは1773年には、そのパンですら高くなり、貧者は飢え死にしそうだと警告した(Price 383)。

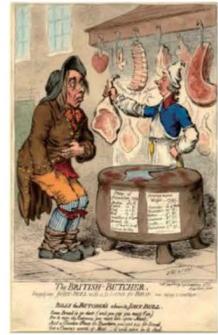
プライスの警告より20年後には貧者の困窮状態はさらに逼迫していた。特に、数年に渡る冷冬がピークに達した1794年から1795年の冬の大飢饉は兵士用の食料が必要とされた対仏戦争中に起こり、食料の輸入がストップしたりしたので、かつてないほど深刻な食糧難になった。それに対して政府は次の収穫時まで我慢すれば食品価格は安くなるので、それまでは小麦粉だけで作る「白いパン」の代替物として、肉や魚、そして「混合パン」(小麦粉に他の穀物やジャガイモを混ぜたパン)を食べるようにというビラを全国に配布した(Board of Agriculture 579-81)。ギルレイの1795年7月6日の『パンの代替物をジョン・ブルに与える英国の肉屋』【図5】はその代替案を諷刺したものである。この諷刺画では、肉屋に扮した首相のピットがお腹をすかせてがりがりのジョン・ブルにパン

の代替物としてパンより遥かに値段が高いマトンの足を差し出している。ギルレイの1795年のクリスマスイブの日付の『パンの代替物』【図6】も、政府の食糧難対策を諷刺した作品である。ここでは、窓の外でお腹をすかせた群衆がデモをしている最中に、ピットと4人の大臣たちが金貨でできた魚を食べ、ワインを楽しんでいる。注目したいのは、壁の一枚のポスターに、「パンの代替物」として「鹿肉、ローストビーフ、家きん類、かめのスープ、魚のワイン煮、ラゲー、ゼリーなど、バーガンディ産のワイン、シャンパン、トカイワインなどなど」と書かれていることである。かめのスープ、魚のワイン煮、ラゲー〔薬味を利かせた濃い味付けの肉や魚の煮込み〕などは高級なフランス料理である。前に言及したロバート・キャンベルからの引用では、ソースや外国の香辛料を用いたフランス料理が贅沢料理で、ローストビーフなどのイギリス料理は簡素な料理として見なされていたが、この諷刺画では、高級なフランス料理も、イギリスの上流階級が食べる狩猟肉も、国民食のローストビーフも、ともに貧者には手の届かないご馳走であることが示されているのだ。

実際、食糧難の時代ですら、ジェントリー階級は肉料理を食べていた。地方牧師のジェームズ・ウッドフォードは1758年から亡くなる前日の1802年まで自分が食べたものを丹念に日記に記した人物として有名である。彼の日記を覗いてみると、たとえば、1795年3月6日に4人の客にふるまったディナーは、「チキンのボイル」、「高級牛のランプのボイル」、「最高級の大きくてよく太った雄七面鳥のロースト」など、いろいろな種類の肉料理が並んでいる（Woodford 322）。また、ギルレイの諷刺画の日付と近い1795年の7月13日のディナーには、チキンのボイルやマトンの足のローストを食べているし（Woodford 329）、その年のクリスマスには、最高級のサーロインを使ったローストビーフ、高級鳥肉のボイル、ベーコンを堪能している（Woodford 342）。ウッドフォードの食卓に並んだのは伝統的なイギリス料理が多かったが、ギルレイの1795年の諷刺画の視点からすれば、贅沢な食事だったと言える。

ローストビーフと貧者

では、ローストビーフが国民食の国で、ローストビーフどころかパンにも困る貧者たちはローストビーフについてどのように考えていたのだろうか。実際の記録はないが、一つ



【図5】 James Gillray, *The British Butcher Supplying John Bull with a Substitute for Bread* (6 July 1795). ©The Trustees of the British Museum.



【図6】 James Gillray, *Substitutes for Bread* (24 Dec. 1795). © The Trustees of the British Museum.

のヒントをオズワルドの『自然の泣き声』の翌年に出版された福音主義的博愛主義者ハナ・モアが「ウィル・チップ」の偽名で出版した『村の政治—英国のすべての職工、職人、そして日雇い労働者への呼びかけ』（1792）の中に見出すことができる。この作品はフランス革命の急進的思想の蔓延を阻止する目的で書かれた。石工のトム・ホッドは、急進的な思想にかぶれて「自由」と「人間の権利」（More 4）を求める。これに対し、保守的な鍛冶屋ジャック・アンヴィルは、イギリスの政府、社会、法律、宗教は世界で最もよい、「古き良きイギリスが安全なら、私は母国を誇りとし、国のために祈るだろう、母国が危険なときには、私は国のために戦い、死ぬだろう」（More 23）と反対する。この言葉にトムも心を改めて、「古き良きイギリスのローストビーフ」の歌をうたう（More 23）。普段ローストビーフを食べることができない貧者にとってもローストビーフは愛国心を象徴する料理だったのである。そして、もし国のために闘う兵士になれば、地方牧師のウッドフォードが1795年6月4日に大陸の戦場から帰国した兵士たちにふるまった「寄付のディナー」を見ればわかるように、貧者もローストビーフを食べることができた。「寄付のディナー」のメニューは、「ローストビーフとボイルしたビーフなどとパイ、そしてたくさんのマトンの足のロースト」という肉づくしである（Woodford 327）。

結局、ロバート・サウジーが、スペイン人が故国の家族に宛てた手紙の翻訳という形をとった『イギリスからの手紙』（1807）で、次のように述べているように、イギリスとビーフの結びつきは平和と平等の社会を目指す共和主義的な肉食主義の声をかき消すほど強かったと言える。

食事におけるピュタゴラス学派の人々⁴は信仰におけるよりももっと広く知られてきた。トマス・トライオン⁵とかいう人物は一世紀ほど前にそのような学派を作ろうと企てた。彼の墓碑銘を書いた門弟は、彼がその肉体を高めて魂の状態にしたと述べている。しかし、ほとんどどの愚行も同じ性質の土壌のようにイギリスに根をおろしているように見えるけれども、これが帰化されることは決してないだろう。ビーフイーター〔国王衛士〕が名誉の称号であり、兵士たちが祈りの言葉よりもローストビーフの歌をうたいながら戦場へと行進し、そして全国民がジョン・ブルの名前で擬人化されている国では、シャデラク、メシャク、アベデネゴ〔ユダヤの預言者ダニエルの3人の友人〕の豆の食事が普及することはほとんどないだろう。（Southey 3: 161-62）

注

* 本論は、日本英文学会中部支部第69回大会（2017年10月28日、福井大学）シンポジウム「食卓のイギリス—エリザベス朝からロマン主義時代まで」における口頭発表に加筆修正したものである。なお、本論はJSPS 科研費 15H03189, 16H03396 の助成を受けている。

1. オズワルドの伝記に関して、本論はディヴィッド・V・アードマンに従った。オズワルドの生年については諸説あり、ヘンリー・ソルトやハワード・ウィリアムズによれば、1730年生まれである (Salt 113; Howard Williams 179)。
2. ポルフェリオスの『禁肉食論』からの引用はおそらくラテン語版をオズワルド自身が英訳したと思われる。イギリス・ロマン主義時代の新プラトン主義者として有名なトマス・テイラーも『動物の権利の擁護』(1792)で、『禁肉食論』から多くを自分自身の英訳で引用している。テイラーは1823年に英訳『ポルフェリオス選集』を出版した。『禁肉食論』はその中に含まれる。
3. 『エミール』の英訳としては、ウィリアム・ケンリック訳の『エミリアスとソフィアーまたは新制度の教育』(1762)、トマス・ニュージェント訳の『エミリアスまたは教育論』(1763)などがあったが、それらの訳と違うので、おそらくオズワルド自身の訳と思われる。
4. 『オックスフォード英語辞典』によれば、"vegetarian"の初出は1839年である。それ以前は、肉食を控える人を指す語として、"Pythagoreans"や"Brahmins"などの語が使われていた (Morton 17)。
5. トマス・トライオン(1634-1703)は17世紀の菜食主義者。彼の27冊に及ぶ著作はいずれも人気があったが、特に代表作『健康への道』(1683, 1691, 1697)は15年間で5版までいくほど人口に膾炙した (Stuart 62-63)。若きベンジャミン・フランクリンも『健康への道』を読んで一時期菜食主義者になった (Spencer 207, 232)。

引証文献

- Board of Agriculture. "On the Present Scarcity of Provisions." *Annals of Agriculture, and Other Useful Arts*, edited by Arthur Young, vol. 24, London, 1795, pp. 579-81.
- Campbell, R[obert]. *The London Tradesman*. London, 1747.
- Change of Diet: A Ballad: being a Sequel to the Roast Beef of Old England*. 1757. Etching. The British Museum, London. Collection Online.
- Erdman, David V. *Commerce Des Lumieres: John Oswald and the British in Paris, 1790-1793*. U of Missouri P, 1986.
- Fielding, Henry. *The Grub-Street Opera. The Dramatic Works of Henry Fielding, Esq.*, vol. 2, London, 1755, pp. 1-56.
- Gillray, James. *The British Butcher Supplying John Bull with a Substitute for Bread*. 6 July 1795. Etching. The British Museum, London. Collection Online.
- . *French Liberty, British Slavery*. 1792. Etching. The British Museum, London. Collection Online.
- . *Politeness*. 1779. Etching. The British Museum, London. Collection Online.
- . *Substitutes for Bread; -or- Right Honorables, Saving the Loaves, & Dividing the Fishes*. 24 Dec. 1795. Etching. The British Museum, London. Collection Online.
- More, Hannah. *Village Politics: Addressed to All the Mechanics, Journeymen, and Day Labourers, in Great Britain*, by Will Chip. 1792. 2nd ed., London, 1793.
- Morton, Timothy. *Shelley and the Revolution in Taste: The Body and the Natural World*. Cambridge UP, 1994.
- Muralt, [Béat Louis de.] *Letters Describing the Character and Customs of the English and French Nations:*

- With a Curious Essay on Travelling*. Translated from the French, 2nd ed., London, 1726.
- Oswald, John, Member of the Club des Jacobines. *The Cry of Nature; or, an Appeal to Mercy and to Justice, on Behalf of the Persecuted Animals*. London, 1791.
- Price, Richard. *Observations on Reversionary Payments*. 3rd and enlarged ed., London, 1773.
- Ritson, Joseph. *An Essay on Abstinence from Animal Food as a Moral Duty*. London, 1802.
- Rogers, Ben. *Beef And Liberty: Roast Beef, John Bull and the English Nation*. Vintage, 2003.
- Rousseau, Jean-Jacques. *Discourse on the Origin and Foundations of Inequality Among Men*. Translated by Julia Conaway Bondanella, *Rousseau's Political Writings*, edited by Alan Ritter and Julia Conaway Bondanella, W. W. Norton, 1988, pp. 3-57. 『人間不平等起源論』 本田喜代治・平岡昇訳, 岩波文庫, 1957年.
- *Emile or On Education*. Translated by Allan Bloom, Basic Books, 1979. 『エミール』 今野一雄訳, 岩波文庫, 1962年.
- *Emilius; or, an Essay on Education*, by John James Rousseau. Translated by [Thomas] Nugent, London, 1763. 2 vols.
- *Emilius and Sophia; or, A New System of Education*. Translated by the translator of *Eloisa* [William Kenrick], London, 1762. 4 vols.
- Salt, Henry S. *Animal Rights Considered in Relation to Social Progress*. New York and London, 1894.
- Shakespeare, William. *The Life of Henry the Fifth*. Edited by Rory Loughnane, *The New Oxford Shakespeare: The Complete Works: Modern Critical Edition*, general edited by Gary Taylor, John Jowett, Terri Bourus, Gabriel Egan, Oxford UP, 2016, pp. 1529-1606.
- [Southey, Robert.] *Letters from England*, by Don Manuel Alvarez Espriella. 1807. 2nd ed., London, 1808. 3 vols.
- Stuart, Tristram. *The Bloodless Revolution: A Cultural History of Vegetarianism from 1600 to Modern Times*. W. W. Norton, 2007.
- Spencer, Colin. *The Heretic's Feast: A History of Vegetarianism*. Hanover and UP of New England, 1995.
- Taylor, Thomas, translator. *Select Works of Porphyry: Containing His Four Books on Abstinence from Animal Food, His Treatise on the Homeric Cave of the Nymphs*. London, 1823, Kessinger Legacy Reprints.
- [—.] *A Vindication of the Rights of Brutes*. London, 1792.
- Williams, E. F. "The Development of the Meat Industry." *The Making of the Modern British Diet*, edited by Derek Oddy and Derek Miller, Croom Helm, 1976, pp. 44-57.
- Williams, Howard. *The Ethics of Diet: A Catena of Authorities Deprecatory of the Practice of Flesh-Eating*. 1883. U of Illinois P, 2003.
- Woodforde, James. *The Diary of a Country Parson, 1758-1802*. Edited by John Beresford, Canterbury Press, 1999.

(名誉教授・イギリス文学・文化)